Tokyo Union Theological Seminary

実践神学の教授と研究における経験的考察
——一つの概念図——

ドン・ブラウニング

この講義ではまず，「実践神学と公的職能」（Practical Theology and Public Ministry）という授業において，私が牧師課程の一年生に与えた学習課題を説明したく思います。同時にその学習課題を裏付けている解釈学的理論を紹介し，また実践神学といわゆる経験的社会科学の関係に関して，その解釈学的理論が意味していることを説明します。次に，この授業の学習課題と私がシカゴ大学で行った12年間に渡る「宗教，文化と家族研究のプロジェクト」の連続性を明らかにします。この実践神学のプロジェクトは，新しい社会科学的データを作り出すことも，すでにあったデータを自由に使うこともできました。要するに，我々の実践神学の教授と研究がどのようにして互いに影響しあうかを実りの多い形で示したいと思います。

一つの学習課題

拙著『基礎的実践神学論』（*A Fundamental Practical Theology*, 1991）で，私は，12年間にわたって牧師課程の一年生の授業で使った次の学習課題を簡潔に説明しました[1)]。最初の一週間，次の課題を出しました。1）一人一人の学生に，牧師課程の学問的準備を求めるように動機付けた教会の世に対する職能に関連した一つの実際の課題を選んでもらう。この第一段階の一部として，学生はそれぞれ，予備的な形で，その実際の課題に関する自分の「前了解／先入見」（ガーダマーの *Vorurteil, Voreingenommenheiten / preunderstanding*）や可能な回答や解決を説明をすることを通して，その課題を研究できる実践神学的な問

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

いに切り換えてもらう。2）その実際の課題と取り組んでいる教会や社会の指導者に面接を求めることによって，学生が個人的な課題としてのみならず，公的課題として取り組む一助とした。3）この実践神学的課題を取り扱っている二つの重要な学術神学書もしくは聖書テキスト（加えて，注解書）資料を選ぶ。4）選んだ重要資料や面接に提出されている実践神学的課題への説明と回答に対する比較批評的分析を提案するように求める。それはこの説明と規範的回答の中から最も強い見解を指摘するためである。5）教授のためではなくて，面接を受けた人のために，上の1-4番までの段階にわたっている20-25ページのレポートを書いてもらい，学生の実践神学的課題を最もよい形で説明し扱う見解を書いてもらう。6）説得力を持って，また変化を鼓舞（こぶ）する形で，面接を受けた人の世界（彼／彼女の実践，コンテキスト分析，関係した善，道徳原理，物語のビジョン）について十分に豊かで厳密な説明を提供しながら，自分の生まれつつある見解を伝える。7）最後に，第一段階において自分の前了解／先入見が呼び起こされることによって，この研究作業を通して先入見はどのように変わったかを説明してもらう。

幸いなことに，私は常に強い目的意識をもった学生から優れたレポートを受け取ることができたと報告できます。この学習課題は，H.-G.ガーダマーやP.リクールの解釈学的哲学，並びに解釈学的社会学という紛らわしい分野におけるこのパースペクティブの使用に多くを依拠しています[2]。先の学習課題全体は，ガーダマーのアリストテレス的実践智（*phronesis*）の理解を手がかりにしています[3]。上の第1段階で一人一人の学生に自分史から生じられる実践神学的問いを選ぶ，またその問いへ予備的な勘（かん）を暫定的な形で説明してもらう理由の背景には，ガーダマーの「実存の歴史性」（effective history）[4]と「前了解／先入見」[5]についての見解があります。またこの学習課題には，ガーダマーによる応用と理解の分離に対する否定も含まれています。学生とともに，理解が最後の段階で応用を付け加えるのではなくて，むしろ最初の段階から理解が応用への関心に動かされるべきであるというガーダマーの見事な議論を読みます[6]。ガーダマーの「古典」理解，すなわち古典が歴史を形成するもので

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

ある故に私たちの実存の歴史においても潜在しているものであるという論は，学生たちが一人一人の現在の解釈学的実践がどのようにして史跡（monuments of the past）から規範的な方向付けを受けるかという批判的な理解を得られました。この解釈学的プロセスは，アメリカにおけるように，主としてキリスト教文化の歴史に育まれてきたキリスト教徒には辿られますが，キリスト教の古典の他に，神道，儒教，そして仏教の古典によって育まれてきた日本人のキリスト者においては，明らかに異なる仕方で辿られることになるでしょう。ご関心があれば，後の質疑応答の時この違いに戻ってくるかも知れません。

更に私たちは，リクールによる理解から説明へ，また説明から理解へという認識論を用いました[7]。この認識論との密接な関連で，リクールの見事な疎隔（distanciation）概念，すなわち社会科学を歴史的に埋め込まれ（historically embedded），さらに条件付けられた理解（conditioned understanding）というより広い枠に位置づけることによって，社会科学の客観性を相対化する概念を討論しました。社会科学的疎隔の役割を論証するため，学生たちは，ガーダマーとリクールに展開されている理解論と実践智（*phronesis*）論というより広い範疇の下において，自分の実践神学的課題を社会科学による説明的視点を用いるように奨励されます。実践神学的課題の叙述は，経済学，社会構造，階級制度，教育学，そして心理学的な説明という第二義的な要素を検討する前に，先ず自分自身のキリスト者としての実存史（effective history）から解釈することを意味すると私は強調しました。勿論，このナイーブの実存史解釈に基づいて叙述することは，その実存史への真剣な歴史批評学や解釈学に生じられる第二義的な，より批評的な取り戻し，特にその実存史の規範である古典の視点を必要とします。

牧師課程一年生のレポートが比較的に質の高いものであったにもかかわらず，この学習課題は，二つの要点で，彼ら／彼女らにとって難しいものとなりました。第一に，自分が選んだ実際の課題を，十分に絞った研究できる実践神学的な課題へと切り換えることは大変な挑戦でした。第二に，学生たちが，教授に向かってではなくて，面接を受けた人に向かって，最後の部分を書くのは，

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

難しい作業でありました。他人の象徴的世界観に入って，また説得力のある修辞学的にも魅力ある議論を作り出すことは，アメリカ社会の「自分も生き他も生かす」（“Live and let live”）という文化に社会化された学生にとって，大きなチャレンジでありました。しかし，色々な生活状況にいる人たちのために叙述するには，彼らの実存史を描写すると同時に，科学的な疎隔をもって，彼らの生活を形成する社会文化的諸要素を指摘しなければなりません。別の言葉で言うならば，私たちは，解釈学的叙述的や説明的な形態をともにもつ経験という範疇をどのように使うかを知らなければなりません。

学生たちは，自分が書いたレポートを小規模の基礎的実践神学論として考えるように奨励されました。『基礎的実践神学論』（*A Fundamental Practical Theology*, 1991）において，私は，ガーダマーとリクールの phronesis 論（実践智論）と理解論を組織化することによって，叙述神学，歴史神学，組織神学と戦略的実践神学という四つの段階を通じて進む神学的省察を展開しました。解釈叙述的と疎隔された説明という二つの経験的形態は，それぞれの四つの神学的省察段階において特定の役割を持っています。

第一に，新たな神学的省察は，伝統的な実践において断絶が起こるところから出発します。叙述神学で始まっている神学的熟考は，その実践に起こった断絶（実践神学的課題）に対して，最初の，また比較的にナイーブの解釈叙述と説明的な分析を提示します。第二に，歴史神学は，我々が継承した規範，理想と古典を考察することによる自己理解の行為であります。歴史神学においても，主な探求様式は解釈叙述様式であります。しかしなお，我々は，テキスト，史跡（monument），そして出来事を見る時，先ずその条件づけられた背景を把握するために歴史批評学的な説明を使わないと，リクールとラコックが言っているテキストの前面にある意味と方向性（trajectory）を十分理解することができません[8]。他方では，歴史批評的背景を発見すると，その意味と方向性を明らかにする手助けとなりますが，その研究実体がテキスト，史跡（monument），と出来事の意味を決定するわけではありません。

第三に，十分に組織神学や道徳神学と結びついた組織的批判的熟考の段階は，

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

過去の神学においてより良い形で，理解-説明-理解という弁証法を共に捉えなければなりません。この神学の組織的瞬間さえも，特定の神学的視点を作り出す社会文化的状況と神学者が語りかけようとする現在の状況を理解しなければなりません。この神学者たちは，善かれ悪しかれ，どのようにして，神学的思想が出現されている実際の経済的，社会構造的，と心理学的過程を形成するかということを把握しなければなりません。

最後に，第四段階の戦略的実践神学は，なおいっそうの力と正確さをもって理解-説明-理解という弁証法を必要とします。ここで実践神学者たちは，前の三段階を断念しない形で，最終的に独自の計画を提供しなければなりません。この戦略的段階に動いていく時，前の三段階の責任を取らなければ，実践神学は，古い理論-応用モデルの誤り，つまり組織神学と道徳神学の理論をただ手近な状況に応用する罠に落ちてしまいます。

「宗教，文化と家族研究のプロジェクト」

この教室の学習課題と1991—2003年にかけて私が指導した「宗教，文化と家族研究プロジェクト」として呼ばれている実践神学的研究事業の間には，重要な類似性があります。今までに，このプロジェクトは，20冊の書物やＰＢＳ（米国のNHK）で全国放送された大規模なドキュメンタリー映画を生み出しました[9)]。

他の実践神学的プロジェクトと同じく，このプロジェクトも一つの質問から始まりました。かなりの苦労の結果，私たちの質問は次のように定式化されました。現代の家庭を悩ましている急速な変化（離婚率，非結婚の出産，非結婚，や同棲の増加）を考慮するならば，この変化に対して，十分な実践神学的なキリスト教による評価と応答がどのようなものであるか。この定式は，最近の傾向を叙述，説明することに重点を置き，またキリスト教結婚と家族に関する諸伝統を取り戻すために，私たちの批評的-解釈的アプローチに自由を与えました。

実践神学における第一の段階である叙述神学は，いつも素朴で無批判的なも

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

のであるにもかかわらず，非常に大事な瞬間であります。今回，その歴史を通じてキリスト教は，離婚には懐疑的であり，未結婚の出産を思いとどまらせ，また同棲に対してまゆをひそめてきたという印象は免れがたいものでした。しかし徐々に，問題はこの予備的な解釈学的地平がキリスト者の結婚と家族に関する古典へのより慎重な批判的-解釈的回復の下で有効かどうかということになりました。

第一段階に経験的-説明的視点を導入することは，直ぐにその基本的，素朴な説明段階を複雑にしました。多くの特定の社会科学的研究が，ウェーバー／ハーバーマス主義理論によってきちんと整理されました。この理論は，どのようにして制度社会の技術合理性が，家庭，結婚，近所，地域社会における顔と顔の接する領域を征服し，崩壊させているかについてのものです[10]。また，この親密な生活の相互依存に対する制度社会の衝突傾向は，文化的個人主義の出現によって奨励されていると，ロバート・ベラーの立場に従っていました[11]。ラリ・パンパス[12]，ウィリアム・グッド[13]，とアンソニー・ギデンズ[14]のような家族社会学の専門家によると，この過程は，家庭崩壊や結婚の衰微をもたらす近代やポストモダン生活の避けがたい結果であると信じています。自由市場経済制度の技術的合理性が実生活に蔓延すればするほどに，人間の親密な関係が次第に費用効果計算に還元され，そして経済的相互依存性が夫妻関係から仕事，政府や福祉的譲渡に移動する，と合理選択理論家（rational-choice theorists）であるガリ・ベッカとリチャード・ポズナーは主張しています[15]。

エンゲルスは，『家族，個人財産と国家の起源』という書物の中で，市場の合理性によって家族が害されると予言しました[16]。しかし，社会主義の国々が家族をより強く支えられるというエンゲルスの希望は，正しくないことが示されました。ここでもハーバーマスは，社会学者アレン・ウワゥルフとともに，技術的合理主義な政府の官僚主義や福祉的介入という形をとりうることを示しています。それらは慎重に実行されなければ，市民社会を家族の相互依存性を害することになります。ウワゥルフが言う「市場の家族」のもっともよい例である合衆国の家族崩壊の割合やウワゥルフが言う「国家の家族」のもっともよい

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

例である，より社会主義的スウェーデンにおける家族崩壊の進み度合いがきわめて類似しているということに驚く必要はありません[17]。すぐれた福祉国家スウェーデン[18]と活力ある市場を持つ合衆国で最近行われた徹底的調査研究によると，生みの親に育てられていない子どもたちは，平均よりも2，3倍の率で，学校を中退し，未婚の時に子どもを生む，また就職することに混乱を覚えていると証明されています[19]。要するに，現代社会において増加している技術合理性への依存による利益は，より市場中心の国でも社会主義的国々においても，家族や結婚制度に対する曖昧な結果をもたらしています。

研究質問を更に明らかにする

我々の近代家族に関する最初のナイーブな叙述は，このような社会学的な研究によって深められ，また最初の質問を再定式化するように導かれました。我々は，次第に次のように問うようになりました。避けられがたい技術合理性の増加とそれの家族に対する不明確な影響から見て，教会と公的つとめにおいて教会は，1）これらの家族変化に抵抗すべきでしょうか，2）この変化の結果である増々断片化されている家族を支えるべきでしょうか，3）何らかの抵抗と支えの結合をすべきでしょうか。このように見ると，問題はただ家族という課題で止まっていない，むしろ現代そのものに対する教会の態度についての課題であります。

この新たに投げかけられた質問を取り扱うために，我々の研究は，叙述神学，歴史神学，組織神学，道徳神学と戦略実践神学という解釈学的円環を通過しました。ここでは，私はこの実践-解釈学的円環の様々な次元を踏んだこのプロジェクトが生み出した多くの書物には触れません。

その代わりに，このプロジェクトの梗概として『文化戦争から共通点へ――宗教と米国における家族論争』という本を紹介します[20]。この本は実践-解釈学的円環全体に触れますが，特に叙述的と戦略的な解釈と議論に重点を置いています。

家族変化に抵抗するか，その変化を受け入れ支えるか，それから批判的に抵

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

抗し選択的に支えるかという上に述べた三つの選択肢の中から我々は，三番目のアプローチを選びました。他の書物においても，私はこの立場を取っています[21]。これらの家族変化に抵抗することは，教会の家族に対する宣教への反文化的スタンスであります。文化的個人主義と技術的合理性の間の陰謀は，全く良いものでも必然的なものでもないと，その批判的見解は主張しています。預言者的な教会のつとめは，このような傾向を批判しなければなりません。

この再構成された解釈学的プロセスを例証するため，次の二つの相互に関係する重要な課題を紹介します。1) キリスト教の結婚における父権制の役割，と 2) 21 世紀の家族にとっての適切な愛の神学の本質。

父権制

私たちは，直ぐに初期キリスト教をとりまいていた「名誉と恥」の文化的背景に関する最近の研究を発見しました。この研究は，初期キリスト教における父権制の役割を明らかにし，再びリクールの言葉を用いるなら，イエス運動の発生期にはじまりつつあった愛と結婚公約の本質に関する方向性（trajectory）を明らかにしました。その学術研究において，新約聖書学者である Bruce Melina[22]，Halvor Moxnes[23] と Karl Sandnes[24] は，「名誉–恥」文化に関する最新の人類学的学説を手掛かりにしています[25]。この見解によると，イスラエルの都市の中心街でのローマ・ヘレニズムを含む古代のヘレニズム文化における結婚関係と男性の名誉を権勢や作因（agency）と結びつける通俗的倫理によって決定されるものとみています。例えば，自由人のギリシャ男性の妻，母，姉妹か娘が暴行か侮辱を受けた場合，権勢や名誉を持った男性は，決闘に至るような攻勢的防衛手段である「突き返し」（riposte）をもって反応しました。ここでもし男性が失敗したならば，その男性は恥をかき，弱く，屈辱的で，作因（agency）のない者として扱われました。これに反して，この文化においては女性が，恥の念を持つとともにそれを表現することを名誉と考えました[26]。従って，このことは，女性たちは，できる限り夫，父，兄弟か叔父の保護と指導に服従することによって，自分の生活を家庭内の領域に限定することを意味しま

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

した。

この家庭倫理は，地中海の市民文化圏に広く行き渡りました。主イエスの弟子たちと使徒パウロは，一定程度，疑いなく彼らの周囲の「名誉-恥」文化に影響されました。同時に，初期キリスト教は，この「名誉-恥」文化に抵抗し，ややそれを破砕したという証拠もあります。エフェソ5章25節に記されている僕である夫や父というモデルは，権勢と作因的な男性像を逆転します。またエフェソ5章28節での「自分の体のように妻を愛さなければなりません」という命令は，夫妻関係に関するアリストテレスの貴族的理解に真っ向から反抗する形に，隣人愛原理を結婚と家庭内の人間関係にもたらします。キリスト教の聖礼典と契約という象徴は，段々と僕である夫と父というモデルとして発展されました。

新しい愛の倫理

『文化戦争から共通理解へ』や他の家族に関する著作において，私は初期キリスト教における家庭-結婚神学として，聖書テキストの前面において「平等互敬愛の倫理」（love ethic of equal regard）の傾向が出現されつつあったと，主張してきました。この愛の倫理は，無限の例に見出すことができます。例えば，家の教会（house church）の愛餐（agape）への女性参加[27]，女性伝道者の出現，またキリスト者の夫が妻にいっそう多くの自由を与えようとすることによって市民文化が混乱されると言う第一ペテロの否定さえも，この倫理が言い表されています。(そのことが実際に起こらなければこのような否定は必要なかったでしょうが。[28]) こうして「名誉-恥文化」に関する文献は，新約聖書の規範的テキストの前面に開かれていた世界内存在様式の背景に対する歴史批評学が説明的洞察を提供することにおける有用な役割を描写しています。

私と私の協力学者たちは，「平等互敬愛の倫理」という理想に基づいた結婚の規範倫理を展開してきました。この概念は，初めて「平等互敬愛の倫理」という言葉を作り出した新カント派の Gene Outka の洞察よりも，Louis Janssens という新トマス派の洞察を手掛かりにしてさらにちみつに組み立てられました[29]。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

この見解は，夫と妻の威厳への奮闘を要する平等互敬や，夫と妻両者による人生の目的論的善（teleological goods of life）に対する平等努力を要します[30]。この見解は，十字架によって要求されている自己犠牲的愛を，それ自体を目的とするよりも，平等互敬愛の更新への手段として見ています。

この倫理は，家庭や結婚に対する近代の衝撃への批判や，幾つかの近代の価値観への評価をもたらしました。近代が女性に政治や有給職の公界を開いた限りにおいて，我々は近代を善いものとして見ていました。しかし，近代が結婚や家庭を市場の費用と便益関係に吸収してしまった限りにおいて，我々は近代への批判と抵抗を開始しました。私たちは，教会が近代から撤退することを求めませんでした。むしろ，近代の拡大されていく文化的論理に対する幅広い削減を主張しました。これらの提案は，『文化戦争から共通理解へ』の最後の各章で詳しく書かれています[31]。

しかしながら，私たちの戦略的な実践神学は，近代化とシステム界の力学を削減するところにだけもっぱら建設的な強調点をおくことはしませんでした。それよりも大切なのは，キリスト者たちが生活する社会における結婚と家庭文化を更新することです。何よりも，家庭や結婚の更新は，宗教的や法的に，結婚と家庭伝統への批判的な回復を通して成し遂げなければなりません。

さらに，私が『結婚と近代化』（2003 年）で指摘したように，キリスト教結婚伝統の批判的回復は，他の主要な宗教伝統（ユダヤ教，イスラム教，仏教，ヒンドゥー教，儒教）の批判的回復と相伴って行わなければなりません。私の見解を言うならば，このような比較研究は，批判的相関的（critical-correlational）な試みとして行わなければならないと思います。このような諸宗教間における対話は，キリスト教の伝統の独自で，しかも永久的貢献となりうるものに焦点を合わせると同時に，益々結婚と家庭に対する公論説が経済，健康，法的な視点に支配されてしまっているこの時代において，それぞれの宗教を公的周辺化（public marginalization）から守るためにも不可欠であると思います。

正しく理解されるならば，諸科学と会話している実践神学は，私たちの教え方に影響を及ぼすべきだと思います。さらにこの学際的会話は，私たちが実践

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

神学的研究事業を形成するための助けとなるべきだと思います。私は，この講義で，この二つの点を論証し，また「宗教，文化と家族研究のプロジェクト」という実際例を通して例証したつもりでした。御清聴ありがとうございました。

（シカゴ大学名誉教授［神学部，宗教倫理と社会科学］／
翻訳　トマス・ヘイスティングス）

注

1) Don Browning, *A Fundamental Practical Theology* (Minneapolis: Fortress Press, 1991), p. 7.
2) Robert Bellah, Richard Madsen, William Sullivan, Ann Swidler, and Steven Tipton, *Habits of the Heart* (Berkeley:University of California Press, 1985), pp. 301-306.
3) Hans-Georg Gadamer, *Truth and Method* (New York: Crossroad, 1982), pp. 278-280.
4) Ibid., pp. 267-268.
5) Ibid., pp. 235-237.
6) Ibid., p. 289.
7) Paul Ricœur, *Hermeneutics and the Human Sciences* (Cambridge: Cambridge University Press, 1982), pp. 87-90.
8) André LaCocque and Paul Ricœur, *Thinking Biblically: Exegetical and Hermeneutical Studies* (Chicago: University of Chicago Press, 1998), pp. xi, xii.
9) The title of the documentary was "Marriage — Just a Piece of Paper?" and was accompanied by a book of transcripts edited by Kathy Anderson, Don Browning, Brian Boyer, *Marriage—Just a Piece of Paper?* (Grand Rapids: Eerdmans, 2002).
10) Jürgen Habermas, *The Theory of Communicative Action* (Boston: Beacon Press, 1987) p. 333.
11) Bellah et al., *Habits of the Heart*, p. 35.
12) Larry Bumpass, "What's Happening to the Family? Interactions between Demographics and Institutional Change," *Demography,* 27:4 (November, 1990), p. 493.
13) William Goode, *World Changes in Divorce Patterns* (New Haven: Yale University Press, 1992).

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

14) Anthony Giddens, *The Transformation of Intimacy* (Stanford: Stanford University Press, 1992).

15) Gary Becker, *A Treatise on the Family* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991); Richard Posner, *Sex and Reason* (Cambridge: Harvard University Press, 1992).

16) Friederich Engels, *The Origin of the Family, Private Property, and the State* (New York: International Publications, 1972).

17) Alan Wolfe, *Whose Keeper? Social Science and Moral Obligation* (Berkeley: University of California Press, 1989), p. 52, 133.

18) Gunilla Ringback Weitoft, Anders Hjern, Bengt Haglund, Mans Rosen, "Morality, severe morbidity in injury in children living with single parents in Sweden: a population-based study," *The Lancet*, 361 (January 25), pp. 289-295.

19) Sara McLanahan and Gary Sandefur, *Growing up with a Single Parent* (Princeton: Princeton University Press, 1994), pp. 32-38. Loss of income is a contributing factor but only accounts for half of the differential between children raised in intact and disrupted families.

20) Don Browning, Bonnie Miller-McLemore, Pamela Couture, Bernie Lyon, and Robert Franklin, *From Culture Wars to Common Ground: Religion and the American Family Debate* (Louisville: Westminster John Knox Press, 1997, 2000).

21) Don Browning and Gloria Rodriguez, *Reweaving the Social Tapestry: Toward a Public Philosophy and Policy for Families* (New York: Norton, 2002); and Don Browning, *Marriage and Modernization: How Globalization Threatens Marriage and What to Do about It* (Grand Rapids: Eerdmans, 2003).

22) Bruce Malina, *The New Testament World: Insights from Cultural Anthropology* (Louisville: Westminster John Knox Press, 1993).

23) Halvor Moxnes, "Honor and Shame," *Biblical Theology Bulletin* 23, pp. 167-175.

24) Karl Sandnes, *A New Family: Conversation and Ecclesiology in the Early Church with Cross-Comparisons* (New York: Peter Lang, 1994).

25) J. G. Peristiany and Julian Pitt-Rivers (eds.), *Honor-Shame: The Values of Mediterranean Society* (United Kingdom: Weidenfeld and Nicholson, 1966).

26) Carolyn Osiek and David Balch, *Families in the New Testament World : Households and House Churches* (Louisville: Westminster John Knox Press, 1997).

27) Louis Janssens, "Norms and Priorities of a Love Ethics," *Louvain Studies* 6 (Spring 1977), pp. 207-237; Gene Outka, *Agape: An Ethical Analysis* (New Haven: Yale

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

University Press, 1972).

28) Browning et al., *From Culture Wars to Common Ground*, pp. 276-279.

29) Ibid., pp. 316-318.

30) Ibid., p. 331.

31) Ibid., pp. 328-329; Browning, *Marriage and Modernization*, pp. 191-210.

NII-Electronic Library Service